

---

# リアン 壊れた記憶と絆の世界

FION

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リアン 壊れた記憶と絆の世界

### 【ZINEード】

Z9533

### 【作者名】

FION

### 【あらすじ】

世界には様々な人が住んでいる。

あなたの住んでいる世界だけが世界ではない。

あなたの直ぐ近くにも別の世界はあるのだ。

パラレルワールドやらと言われるものだ。

そんな重複世界のなかでオレは大切な記憶を探して彷徨つた。

いや、これからも彷徨い続けるだろう。

隣でこいつが笑ってくれている限り……。

まあ、そんなわけで恋愛しながら冒険する ん？ 逆か……？

冒険しながら恋愛する……（？）

あれ、冒険するか？ ってな感じのお話しです。

握った手を離すことが出来なかつた。  
離そつとすればするほど、強く堅く握つてしまつ。  
……でも、やつぱり離さなければいけないんだ。  
わかつてた……。わかつてるつもりだつた……。  
その手を求めちゃいけないことも、そこにはいるのが……あいつじ  
やないことも。

「…………」

田が覚めるとオレは布団の中で丸くなつていた。  
まあ、あれだ、夢を見ていたらしい。

「夢…………」

まだ、さつきつと覚えている手の感触を確かめる様に手を強く握  
る。

「夢、だよな…………」

もう一度言葉にすると、田の奥に熱いモノが溜まつてこるので  
気付く。

それは、間違いなく涙だつた。

いつから涙を溜めていたのかわからない、ただ溢れ出した涙は止  
まらない。

「はは……。夢見て泣くか、普通」

しづらへ経つと涙拭い、まだ生温かさの残る手をゆっくりと開

く。

手を開くと、手に残つた温もりは消えていった。

廊下は、がやがやと賑わいを見せていた。中には、別のクラスまで足を運んでいる者もいるだろう。

オレは、やかましい廊下を急いで抜け、自分の教室に入る。

「つと……（月見里……月見里……）」

座席表を見て自分の席を確認する。そう、今日は入学式、高校生として新しい生活が始まるのだ。つと言つても、それらしい実感もなく。とりあえず席に着き周りを見渡す。

「知つてゐる奴は……いないか」

まあ同じ中学から入学した奴は少ないしな……。まだ時間があるので確認すると、鞄から小説、所謂ライトノベルを取り出し読み始める。

（そういう朝の夢、アニメか何かの話だつたのかな……）

そういう考えるのが一番自然なかも知れない。妙にはつきり覚えてゐるし、昔みたアニメが記憶の隅に残つてゐるなんてのは良くある話だつ。

「夢、ね……」

無意識にそう呟くと、ラノベを片手に持ち掌を見つめていた。

「夢がどうかしたの一？」

不意に田の前に顔が現れた。優しそうな女の子の笑顔が向けられている。

「えつと……」

つい言葉に詰まる。突然知らない女の子に声を掛けられたんだ。それにいきなり夢がどうしたとか聞かれても、そんな事を考えていると相手が察してくれたのか、隣の机に腰を下ろして口を開く。

「私は、小鳥遊詩歌。えつと、つきみぞと君?」

たかなし しいか、と言つたりじい女の子は、短めの薄茶色の髪を

右の方でくくつていいる、何とも活発そうな笑顔をした少女のような女子子だった。正直、かなり可愛い。だが、胸がデカイ……。貧乳派のオレにとつてこの胸は少々致命的だ。

「つきみざと君……？」

つきみざと……。まず、オレのことだらうな。座席表でも見たのか……。

「オレは、やまなし  
かける月見里翔」

確かに“つきみざと”と読むが本当は“やまなし”だ。つと少々威張つてみたりすると。

「ほえー。私より珍しい苗字初めて見たよ……！？ なんでこれで“やまなし”って読むの？」  
などと、質問してきやがつたわけだけど……。まあオレが知つてるわけもなく……。

「さあ……。気分じやない？」

つと、詩歌は一人で大笑いを始めた。 つて、小鳥遊はずるい。読めない名字として有名すぎるだろ……。

「あはは。小鳥遊はねえ、子鳥が遊んでもだい

「知つてる。それは結構有名だろ？」

今度は一人で思い切り笑いあつた。 はあ、完全に向こうのペースじやないか……。まつ、いいけど。実際、この詩歌つて子は一緒にいて楽しいと思う。胸以外はビストライクの姿もある。

ただ、何かがこづ……モヤモヤと引っ掛かっていた。

「それで、夢つて何のこと？」

思いつきり笑つた後に詩歌が首を傾げて聞いてきた。

「……。ん……？」

同じように首を傾げる。

「ほら、さつき言つてたじやん。掌見つめて、夢がどうとかつて

「あー、今朝見た夢が結構リアルだつたなあつと思つてさ」  
詩歌の目の輝きが一瞬増したような気がしたが……。

「へえー、どんな夢なの?」

「何でそんなに夢のこと気にするんだ?」

なんとなく口から出た言葉。詩歌は、はつと息を呑み何故か少し頬を赤らめている。

「いや……。えっと、そのお……」

突然目線を彷徨わせ始めた。んー。変なこと聞いたらやったかな……。

暫く沈黙が続き、担任が教室に入つてみると、詩歌は苦笑いしたまま隣の席に着いた。

入学式から数日後

もう授業も終わり学校に残つてるのは、体験入部やらで各自の部活を見学している生徒くらいだらう。ましてや、教室に残つている者など普段ならいないはずの時間だった。

オレの隣の席には、詩歌が座り紙の束を眺めている。オレの手にも紙の束が握られていて、オレはそれを読んでいるわけだが、もちろん、教室で一人きりで……。それも隣同士……。嬉しくないと言つたら嘘になる。

しかし、集中できねえ。緊張して心臓の鼓動が速く、大きくなつていく気がする。

いつからか、オレの田線は手に握られた紙の束ではなく、詩歌のほうにいつっていた。

1日前 入学式やら実力テストやらが終わり、周りでは、「部活どうする?」「など部活の話しがメインになつてきた。

「部活ねえ……」

もちろんオレにもその手の質問がくるわけで、オレはその度にそういう応えていた。

特に入りたい部活があるわけでもなく。だからといって何も入らないのはどうかと思う。などと考えながら部活紹介の冊子をパラパラしていると隣から声を掛けられた。

「入る部活決まつたー？」

「お前もそれか……。気怠そうに詩歌のほうをむき。  
まだだけど……。詩歌は？」

特に興味もなかつたが参考までに聞いておく」と云ふ。

「まあ一応はね……」

詩歌は苦笑いしながらそういうと、言葉を選ぶよつこじて続けた。  
「あのや、翔つて本とか好きだよね……？」

「あー、まあ好きだよ……？」

何で急に本の話になつたんだ？ とか考へていると、詩歌が少し言いづらそうに口を開く。

「文芸部とか興味ない？」

「ん？ 文芸部なんてあつたつけ……？」

見ていた部活紹介の冊子をパラパラとめぐる。

「ないよ……。だから一緒に創らない？」

「……は？」

職員室、担任の水沢先生のところに行くと、詩歌と一人、職員室の隅のテーブルまで案内される。詩歌が既に話をしていたらしい。

「今日のところは二人か。他の子にも声は掛けたの……？」

水沢先生は少し嬉しそうな様子で詩歌に聞いた。

「あ、いえ……。知り合いも少ないので……」

それから、二人は部活についての話をしていた。まあ、オレは適当に聞き流す。オレが聞いてもわからんし、文芸部設立が成功したとして部長は詩歌がやるはずだ。

「……。まあ、人数がそろわない事には何ともなあ……。せめて小説書いた経験がある奴とかいればいいんだが……」

大体話したい事は終わつたらしい。そつと水沢先生は腰をあげようとする。

「ん? どうした?」

詩歌と水沢先生が突然手を挙げたオレに目をやる。  
「えつと……。小説書いたことがありますよ。初心者用のサイトに投稿するくらいですけど」

おそるおそる手を挙げて言つたオレを詩歌と水沢先生の一人は驚きの表情で見つめる。

「ホントか? それじゃ一つ読ませてくれ

「え……。やっぱり読みますよね?」

ふう  
、職員室をでると長く息を吐く。まさか、自分が書いた小説を誰かに見せるときが来るとはな……。詩歌のほうに目をやると、遠慮がちにこいつをちらちら見ていた。

「あー。お前も小説読む……?」

「読むつ!」

案の定即答されたわけで……。頼むからそんな期待の目でオレを見ないでくれ……。

自作の小説を水沢先生に渡すと詩歌の待つ教室に戻った。

「……」

「なんか真剣に読んでる……。あはは……オレの書いた小説ですね。」

「ふう……」

軽く息を吐くと自分の席  
詩歌の隣の席に座り、さつき水沢先生からもらつた紙の束に目を通す。演劇の台本に先生が書き方のポイントを書き加えたものだ。

詩歌の話によると、我らが担任水沢は、担当科目は国語。演劇部顧問で文芸部設立時には文芸部の顧問も掛け持ちしてくれるらしい。

『上手いじゃないか。演劇部の台本書いてみないか?』

そう、いつて渡された台本……。何で用意されてんだ? とか、いろいろ思つたが、まあ掛け持ちとか楽しやないだろうし……。受け取つたのはそんな心境なわけだよ。

「（やつは台本と小説って全然違うんだな……）ちらつと詩歌のほうを見ると真剣に小説を読んでいた。その表情が楽しそうだったので少し安心したがやっぱり人に読まれるのは恥ずかしい。

少し頬を赤くし、台本へと目を戻す。……が、集中でき  
ねえ。できるわけがない。緊張して心臓の鼓動が速く、大きくなつ  
ていく気がする。

いつからか、オレの目線は演劇の台本ではなく、詩歌のほうにいた。あと、オレの書いた小説に……。

だあ！」

そりや叫びたくなるだろ。こんな状況は初めてだ。ただの沈黙でも耐えがたいのにこの沈黙は無理だ。

「ほえっ！？　いたの？」  
「一歩」と。すみません。

あからさまに驚きの表情を浮かべる詩歌についつて謝りてしまつ。て  
しらじた……「みせへ

「小説上手だね。私もこんな風に書いてみたいな  
が、気付いてなかつたのかよ……。」

「そんなことないだろ……」

「聞きたかったけど、何で小説書こなして思ったの？」

詩歌は少し小説を読み進めると、小説を置いてオレのせいつをむべ多分きりのこいこいろまで読んだのだらう。

「覚えてない。まあ書くの楽しいしや、なんか語りたがるのって樂  
いだ？」 あ、そつこや詩歌は？

「私？ 私は書いたことないからわかんないけど、書けたら楽しいかなって。それに……」

明らかに表情が曇つた。何か言いににくい事があるのか……？ 小説

説書く理由に……？

「言いたくないなら言わなくていいよ。べつにそこまで聞きたかつたわけでもないし」

「言いたくないわけじゃないけど……。うん、ありがと」  
詩歌が俯き頷くと二人とも黙つてしまつ。しばらくの沈黙  
破つたのはオレの口から出た言葉だった。

「あのさ、詩歌とオレって昔あつたことない？」

## Chapter 2

何でだら……。詩歌を見ると胸が苦しくなる。初めて会った日から、ずっと……。

一日惚れつて奴なのか……？ わからないけど、恋とは何か違う気がする。

この気持ちは恋じゃない。あの笑顔を昔見たことがあるんだ。

このモヤモヤした気分は思い出せない苛立ちだらう。なにか大切な事が思い出せない時のそれと良く似ていた。それがもつと強くなつた感じの……。

また、胸が苦しくなる……。詩歌の顔が浮かび遠ざかる……。

『デージ』

不意に誰かの声が聞こえた気がした。そして、誰かの顔が頭を掠める。

詩歌に似た女の子……。オレはその子を良く知つてこる……。知つてているはずだった……。

思い出せない……いや、思い出すのが恐い……？

辛い……。思い出したくない……。けど、思い出せなきやいけない。何故だかわからぬにかどしゃぶりた。

詩歌といえば思い出せるのかな……。

思い出したくない何か……。

オレは入学式の朝のことを思い出していた。あの日見た夢の「」とを……。

『デージ』

夢で繋いだ手の感触を思い出しながら、やつ眩いた。

彼女は窓もなく薄い明かりに照らされた暗い部屋にあった。

ソレは、短めの髪、大きめの瞳、普通よりも少し大きいくらいの胸、柔らかい白い肌、笑えばかなり可愛いであろう口元、それらのパーツを身体に持ち、生きていた。

彼女は、しつかりと血も流れ脈打ち確かにそこにいる。しかし、彼女の心臓は幾重にも重なった部品や歯車で出来ていた。ソレは、確かに感情を持つているが自分の感情に従うことは出来ない　いや、しない。

彼女は、限りなく完全で限りなく不完全な“人の形をした機械”だった。人としては生きていけず、しかし機械と言うよりは余りにも人なのだ。

「ゴメンね……。あなたを作つて……」

ソレが何度も聞いた言葉……。彼女を作つた人が発した言葉だ。「なぜ、謝るのですか？」

ソレは、淡淡と言い。目の前にいるその人へと目を向ける。

「……。ううん、謝りたかっただけだから」

何度も聞いた返答。その人の悲しい顔は見たくなかった。でも、彼女にはどうすることもできなかつた。

「あのね。こないだした約束。この部屋から出ちゃダメってやつ……。なしにするから、一緒に外に行こう?」

「はい」

約束　それは彼女にとつては命令だつた。作った本人もそれはわかっていたろう。それだけ外に出したくなかったはずだつた。けれど、その人は彼女を連れて外に出た。

外に出ると車に乗り人気のない所まで行つて車を止める。

「あなたをもつと自由にしてあげたかった。敵のいない自由な世界で……」

ソレは、黙つて聞いていた。胸が辛くなるのを感じながら……。  
「そうね……。この“鷹のいない小鳥が自由に遊べる空”にあなた  
を放つてあげられたら……」

その人は、そういうと空を見上げて少し涼しそうな顔をする。

「鷹のいない空ですか……」

彼女は知っていた。自分が壊されようとしていることを……。彼  
女を作ったその人にはない。世界の人々から壊されようとしてい  
るのだ。

神が自分の姿にまねて人を創ったと言つ。人が人を作る  
こと 神に近づき過ぎること、は許されることじやないらし  
い。そんなこと気にしない人もいるだろう。彼女にもよくわからな  
い事だった。

「……。私を殺して……？」

彼女の製作者　彼女の産みの親である、その人が静かに優しい  
笑顔を向けてそう言つた。

「……はい」

殺したくなかった。けれど、彼女にはどうすることもできない。

「ゴメンね……」

その人は最後にそう言つた。ソレは最も辛くないであろう殺し方  
で自分の親を殺した。

彼女は、泣くことはできた　けれど、泣きかたを知らなかつた。  
そして、胸の苦しみに耐えられず自分も死のうと思つた。

「……」

何度も自分を殺した。親にしたのと同じ方法もそれ以外も……。

彼女は死ぬことも出来なかつた。そして彼女はこう思い、  
口にした。

『べつの世界で生きたい』

それは、彼女が自分の感情に初めて従つた時だつたろう。口にす  
ると涙が溢れてきた。　　彼女を作ってくれた人の笑顔、敵の

鷹のいない自由な空を、思つて涙を流した。

『S.i - c.a』

彼女の首に付けられた首輪にそう刻まれていた。それが彼女の名前だった。

一年に数回、長期休暇の時にやつてくる男の子がいた。

私はその男の子が大好きだった。

その男の子が来る度に近所の神社に誘い、みんなで遊んだ。  
みんなとは、私の友達、私も入れて4人。男女2人ずつ、その男の子を入れると男子のほうが一人多くなる。

その男の子が来ると決まって鬼ごっこをして遊んだ。私は走るのが好きだったから、みんなも鬼ごっこでいいと言つてくれていた。その日も、雪の積もった神社で鬼ごっこをしていた。鬼は、その男の子だ。

私を追いかけて、派手に転ぶ。

「雪に慣れてないから転んだんだっ！」

と、転んだまま言つていた。私はその男の子に近づき微笑んだ。

「ドージ」

その男の子に最高の笑顔でそつ言つた。そして、その男の子に手を差し出す。

その男の子が私の手をとると思いつきり引っ張つて立ち上がらせる。そして

「大好き……私と付き合つてください」

私は、どんな顔をしていただろう。その男の子は、しばらく考え込み黙つて頷いた。

「大丈夫だよ」

私は目の前の男の子にそう言った。

今、どんな顔しているのだろう。笑えているのかな……？  
んでいないだろうか……。

悲し

「帰つたらメールするから」

男の子はそう言って部屋から出て行った。

「大好き……」

私は男の子がいなくなつた場所を見つめ呴いていた。

## Chapter 2 (後書き)

『Sica』の話は短編として投稿予定だったり……。

今日も詩歌と一緒に教室に残つた。一人で演劇の台本を考えるためだ。

まだ文芸部として活動できるわけじゃないが、水沢先生はこの台本を文芸部が作ったものとして紹介してくれるらしい。部員募集のチラシも用意してくれて、本当に良くしてくれている。

「文芸部、できるといいな……」

「そう呟くと詩歌は笑顔で頷いた。

「ありがとね。私が小説書きたい理由……翔には聞いて欲しいかも」

詩歌は少し言葉を濁らせてそう言った。オレは黙つて聞く姿勢になる。

「あのね、笑わないでよ……？　本の世界つて、私たちのいる□□とは違う世界なわけじゃん？　それで、そういうのが重複世界パラレルワールドって言うのかなって。だったら、それを書くのってすごいことでしょ。それに……」

詩歌は少し頬を赤らめてそう言った。続きをあるのかと思つて黙つていたが詩歌は黙つたままだった。

「……なんか凄いこと考えてたんだな。確かにそういう考え方もあるかもな」

オレは真剣な表情で頷いた。詩歌はそれを聞くと再び話し始めた。「私ね、多分この世界の人じゃないの……。確かに昔の記憶はあるけど、少しづれてると言つか……変なの」

「は……？　意味がわからない……。

「なにが……？」

「だから、記憶が変なの……。中学より前くらいから自分の記憶が変なんだよ……」

「はい……？　記憶が変……？　オレの表情を読み取った詩歌は再

び口を開く。

「翔だつて、前に言つてたでしょ？ 私と昔会つた気がするとか…」

…

「言つたけど……」

そこでハツと息を呑んだ。オレが詩歌といいる時に感じているモヤモヤ……オレも何か忘れてる。大切なことなのに思い出せない……。けど、それは昔の事だぞ？ 重複世界やらは関係のないことだ。

「なあ、オレで良ければ詳しく聞かせてくれ」

気がつくと、そう言つて詩歌の話に耳を傾けている。詩歌は少し驚いて嬉しそうな顔をした。

「あのね、中学くらいかな、それから後の記憶はちゃんと私のものだつて確信できるの。けど、それ以前の記憶はどこか曖昧で……。それに私普通に笑えてるでしょ？ けど、中学より前の時、私が笑つてるのが何故か不思議なの。私は笑えないはずなのに泣けないはずなのになつて……」

自分が自分でないような感覚つてことだらうか。本当のことなら中学より前だけつてのは確かにおかしいのかもしない。

「それで詩歌はどうしたいんだ……？」

「私は、自分の本当の世界を探したい……。だから、いろんな世界を見たかった」

「それで小説か……」

軽く息を吐く。詩歌は「冗談を言つてるわけじゃないらしい。

「それじゃ、私は自分の世界を、翔は自分の過去を、目的は一致だね！」

オレは、なんとなく自分が詩歌に対して抱いているモヤモヤを話した。話しておいたほうがいいと思ったからだ。

「いや、全く一致してないし……。てか、何の目的だよ……？」

「んー？ 自分探し？ 大体一緒だと思つけどな」

「そうですか……。てか、オレは昔の事を忘れてるだけだし重複世界がどうとか知らないからな……？」

「ホントに重複世界はあるんだよ……。まつ、これからもヨロシクねー」

「うして、始動前から文芸部はよくわからん方向に突っ走って行くことになってしまった……。

「夢も重複世界ってわけか……？」  
帰り道、遅くなつたので詩歌を家まで送りながら呟くように尋ねた。

「ほえ……。私はそう思つてるけどよくわかつたね」「最初に会つたとき、夢のこと気にしてただろ？」「そうだったね……」

「なんか元気ない……？」

元気がなさそうに俯いた詩歌を見て何事かと首を傾げた。  
「ん……。翔はどこにも行かないでね……。もう、嫌だから大切なひとが私の前からいなくなるの……」

「大切だつて思つてくれてるんだな……？」てか、もうつて昔何かあつたのか……？」

少し頬を赤く染める。やばいドキドキしてきた。

「ほえ？ 肯……？ なにか……？」

詩歌は明らかに困惑していた。眉間にシワを寄せ、頭を抱え込む。その表情がどんどん険しくなつていぐ。

「なつ！ 大丈夫か！？」

詩歌の肩を軽く掴む。

「ちが、違うの……。私は……」

その後、詩歌が何て言つたのかわからなかつた。突然、地面がいや、世界が揺れたんだ。

オレは急いで詩歌の手を握った。そうしなければ詩歌がどこかに行ってしまう そんな気がしたから。

気が着くとそこは知らない場所だった。周囲には少しの家と一つの神社くらいしかない。ドがつくほど田舎だった。

「ここは……？」

詩歌が顔をあげる。オレは急いで握った手を離そつとしたが詩歌が握り返してきた。

「わかんないけど……」

ありえない。詩歌はテレビポートの使い手か……？  
近くにある神社に一人の女の子が……。

「…………つ！？」

オレも詩歌も言葉を失った。そして今度は、オレが頭を抱える番だった。

そこにいたのは、詩歌にそっくりな女の子……。

小学校6年生くらいだろうか……？ オレの頭はその女の子を見ると痛みだした。

それに、この神社も景色も、全部オレは知っていた。まだ、あの女の子のことは思い出せないけれど……。

「オレは……」

そう口にすると、女の子のほうに歩みだしていた。

「やめておいたほうがいい」

不意に後ろから声が聞こえた。

声の聞こえた方を振り返ると、そこには女の子のような顔立ちをした男が立っていた。歳はオレたちと同じか少し下くらい。髪の毛は肩の辺りまで伸びている。キレイな紅い瞳をした 所謂、美

少年だった。

「ボクは、五月七日<sup>つがつ</sup>七日<sup>しづか</sup> 皇<sup>こう</sup> ボクも君たちと同じ、口<sup>くち</sup>とは別の世界から来たんだ」

皇は、笑顔でそう言った。しかし、笑顔で恐い」と言いやがる。

「じゃあ、口<sup>くち</sup>はパラレルワールドだとでも言つのか……？」

詩歌は黙つていた。ただ、何かに怯えたように……。

「まあ、ボクたちの世界から見たらそうなるね……」

皇は少し遠い目をして言った。困惑しているオレたちを見ると再び口を開く。

「ボクを君たちの仲間に 文芸部に入ってくれないか……？」

は……？ オレは言葉を失つた。詩歌も同じらしい。

「えっと、同じ世界の同じ学校なのか……？」

もう頭が真っ白だ……。なにがなんだか……。

「そうだよ。ボクは君たちの隣のクラス。少し見た目が違うかも知れないけれど……」

えつと、どうすればいいんだろう……。ただ、詩歌が「ククク」と頷いていた。

「それじゃ、ヨロシクね。早速だけど、今すぐにでも元の世界に帰らなきや」

皇が微笑んで語つ。少し可愛い……。 とか、言つてる場合じやねえ……。帰るつたつて、ビリヤつて……？ 歩いて帰れる距離じやあるまいし……。

「それじゃ、いいね……？」

皇がオレと詩歌それに問い合わせる。

すると、世界が皇を中心に揺らぎ、気が付けば教室にいた。オレを含めて三人……。

詩歌と……。隣で知らない女の子が笑っていた。

## Chapter 4

「ボクは間違いなく五月七日臯だよ」

オレの田の前にいたのは、さつきまで一緒にいた臯……じゃなかつた。オレと詩歌は目を見合わせ、その女の子を驚きの表情で見つめていた。

「だから、少し見た目が違うかもしれないって言つたじゃん……」

その女の子は拗ねたように唇を尖らせてみせた。

少し見た目が違うって……。どう考へても少しどころうじやないんですけど……。

「ほら? よく見れば似てる気がしてくるつしょ?」

幼さの残る顔、肩まで伸びた髪、薄い胸、そして紅い瞳……。確かに男女って概念を完全に無視することに成功すれば似ていふと言えないこともないのかも知れないが……。

「……。誰?」

オレの口から発せられたのはそれだけだった。

「だーかーらー! 五月七日臯! ロロ以外の世界に干渉する時は男になっちゃうんだよ!」

この臯と言う女の子が言つには、本来なら臯は男として生まれるはずだつたらしい。“この世界の臯”がではなく、“他の大多数の世界の臯”である。

そのため、世界全体の価値観からすれば臯は男である、とされるらしい。臯のように女の子から男の子へといつ大きな変化をすることは少ないが、世界の狭間を越える時に世界はそういうた世界全体とのズレを最小限にしようとするとかしないとか……。

臯によると重複世界は大きく分けて3種類あるらしい。

1つは、単純な過去や未来。

2つ目は、この世界とほとんど同じ表と裏のような世界。

所

謂パラレルワールドだろうか。

もう一つは、小説やアニメなどに出てくる世界だそうだ。

そして、重複世界とやらは、お互いの世界に影響を及ぼさないよう、干渉しあっているのだと言づ。

皐も無条件に重複世界を行き来できるわけじゃないらしく、あまり詳しい事はわからないらしい。上記はすべて皐の仮説だと思つてくれて構わない。

とにかく重複世界とやらは存在した。

それは、詩歌が本当に自分の世界が別にあるのかも知れないということつまり、詩歌がこの世界の人間じやないかも知れない可能性が高まつたつてことだ。

詩歌を家まで送り、オレは皐と一人で残りの帰り道を歩きながら、ずっと気になつていたことを尋ねた。

「なあ。何での時止めたんだ?」

「あの時つて?」

「ほら、別の世界に行つてた時にオレが女の子に……」

まだ……。頭にあの時と同じ痛みが広がる。

「頭、痛いの? 多分ね、月見があの女の子に会つてしまつたら、きつと月見も小鳥も耐えられない……」

どういう意味だ……。というか、月見と小鳥、誰だ……。頭が痛くて突つ込む氣にもなれないが。

口を開こうとするオレを皐は人差し指を唇に置き止める。

「月見には、その頭痛よりも辛いことがあるかも知れないってこと」  
につっこりと笑いながらも淡々と その口調には、はつきりとそれ以上聞くなと言う意思が感じられる。それは、皐にとつて不利益だからとかじやない。ただ、オレを心配してくれているのだ。  
「……。皐は、詩歌のこと、あの女の子のこと知つてるのか?」

「ボクは何も知らないよ……」

皐のその言葉に嘘はなかつた。それがわかつたからオレはもう何も言えなかつた。

「月見、なのかな……。ボクの探してゐる人」

皐は、ベッドに横になりながら、そう呟いた。

皐が初めて別の世界に行つた時、自分の姿が男だと嘘つゝと驚愕した。最初の頃は、そういうもんなんだと思っていた。

しかし、世界を越えても皐が女のままの姿だつた時があった。その時、知つてしまつたのだ。自分が男に生まれるべきだつたということを……。

「ボクは……。間違つた存在なの……？ ボクは、なんなのぞ……」  
まだ幼かつた皐は膝を抱えて泣いていた。

「ボクは、ボクは……」

皐のキレイな紅い瞳は、暗く濁つていた。

まるで、彼女には一度と日の光は当たらないような感覚すら覚える。

「キミは、皐だろ……？ オレにとつて大切な人だ」

不意に皐に光がさした。温かそうな手が皐にむけられている。

皐の濁つてしまつた目には、その光は眩しそぎた。顔を見る」ともできそうにない。

「……」

ただ、皐は黙つて頷くと、光から伸びた温かい手に手を伸ばす。  
「皐……。オレが皐を認めてやる。皐は間違つてなんかいないんだ」

皐は光のほうへ引つ張られ、そして元の世界に戻つていた。

皐の紅い瞳には濁つたものなんて残つてはいなかつた。

ただ、真っ直ぐに、あの光を探すんだ。  
幼かつた皐が心に誓つた、皐の夢……。

『大丈夫か？』

詩歌は黙つて携帯の画面を見つめていた。今にも崩れそうな表情を必死に堪えて……。

翔からのメール。

「慰めてるつもりなのかな……」

『大丈夫だよ』

詩歌はいろいろ言葉を選び、指を動かしたが、結局それだけをメールして携帯を閉じた。

それから、すぐに返信は来たが詩歌はそれを読まなかつた。  
何て書いてあつたとしても気持ちを抑えることはできそうになかつた。

「私は、誰なのかな……？」

世界に裏切られた感覺……。詩歌の周りの全てのモノが人が嘘なんじやないかとさえ思えてくる。

けれど、翔だけは違つた。ちゃんと自分を見てくれていた。  
この気持ちは恋なのかな……。不意に自分の声が頭に浮かぶ。

『ん……。翔はどこにも行かないでね……。もう、嫌だから大切なひとが私の前からいなくなるの……』

自分が翔に言つた言葉。

『大切な人、か……』

少し痛みだした頭を押さえ、呟いた。

オレたち3人は今日も学校に残っていた。

皋が仲間に加わり、文芸部候補だったオレたちは文芸同好会という形で正式に活動が許可された。

あの日 別の世界に行ってしまった日から数日が経ったが、誰も重複世界とやらの話はしようとなかった。

そんなオレたちが学校に残つて何をしているかと言うと 文芸同好会らしく、演劇の台本を考えているわけだ。もう大体の話は決まっている。

それは、一人の少女の話しだ。いや、一人と言つたほうが適當かも知れない。

とある世界に一人の少女がいた。その少女には友達と呼べる友達がいなかった。

そこで、彼女は一つの人形を作ることにした。寂しさが癒えると思つたから。友達が欲しかつたからだ。

一所懸命、気持ちを、心を込めて一人の女の子の形をした人形を作つていく。

もちろん、少女もそれが本当の友達になるなんて思つていない。ただ寂しさを癒して欲しかつた。そばにいてくれる存在が欲しかつたのだ。

人形が完成した時、その人形は人の心を持つてしまつた。

少女の友達が欲しいと言う気持ちが強すぎたのだろう。人形は少女に笑いかけ、そして少女とおしゃべりをした。

次第に人形は動けるようになり、その身体も人間に近いものに変わつていった。

少女は、「気持ちが悪い」と罵られ、その人形以外、誰もまとも

に話してくれなくなつた。

少女は泣いた。けれど、その人形を嫌いになることはなかつた。

しかし、その人形は周りの人間に受け入れられることはなかつた。邪険にされ、中には人形を燃やそうとする人まで何人も現れた。少女の親も例外ではない。

そして、少女は旅に出ることを決意する。その人形を連れて、誰からも非難されない一人で住むことが出来る外の世界。そんな世界を夢見て。

少女たちは外の世界に行くことができた。二人で誰にも邪魔されるずに住むことが出来る世界。

しかし、少女はそんな世界を望んでいたわけじゃない。

望んでいたのは、『友達が欲しい』それだけだった。

彼女は、自らの作つた人形に自分を殺すように命じる。人形は彼女を殺し、自分も後を追おうとした。

しかし、それは人形だった。自分のことを傷つけても死ぬことが出来なかつた。

しばらく、一人の時間が続いた。人形は、自分が最初から人間だつたらと何度も思った。

ある時、その人形から涙が流れた。

その時だつた。神様が人形の元に現れ、その人形を殺してくれたのだ。

それから、少女と人形は、仲の良い友達として生まれ変わり、今も楽しく暮らしている。

大体こんな内容だ。演劇つて言うよりは絵本だ、とかツッコミたいかも知れないがそれは胸にしまつて……。

「これが、詩歌の作りたかつた世界か……」

この話を考えたのは詩歌だ。オレは話を聞き、まとめる係り。皋は……。何かしたか？

「え、あ……うん」

「小鳥の話、すごい面白いよ。あ、面白いっていつも悲しいし……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「……」  
「……」  
「……」

「た。

「わかんない……。でも、この話を考へてる時も、今読んでみても、胸がこう締め付けられるみたいに痛くなるの……。どうしたい、とかはわかんないけど、私は探さなきや行けないんだと思つ」

詩歌は真剣な眼差しでオレと臘を交互に見つめる。

と、急に世界が傾くような感覚に陥る。

「月見つ！ 小鳥の手を……」

臘が何かを叫んでいる。すると、詩歌がオレの手を堅く握る。

何が起きたのか考へる時間なんてなかつた。世界が曲がったかと思つと、オレは知らない場所にいた。

どうやら、別の世界に来てしまつたらしい。

いきなり町のど真ん中に立つてゐるけど、大丈夫なのか……

町の人たちはオレたちが最初からそこに在つたような顔をしていた。

しかし、詩歌の顔を見ると小さな吉

「この世界がビンゴだったのかな?」  
「おーい!?

卷之三

普通) そこにいたのは、男の鼻……。わかつていてもビシクリするよな、

普通……さっきまで女子たちがたんたから「そんなに驚かなくてもいいと思うけどな

「ひだり、びびる」

「そんな」とより、歓迎ムードじやなさそうだよ?」

「勘次。ハーリー、

町の人々を見たまま詩歌に顔を向ける。

「シーカ？」と、何人かの人が口にすると、目の前から竜が飛んできたりしたわけで……。

「 もはやうだね

皋が奥歯を噛み殺す。

「ちが、違うの……！ 私は、何も……！」

わけわかんねえ……。詩歌は、頭抱えてるし、竜は襲つて来るし

١٦٥

「畢つ！この前みたいに元の世界に……」「できなー。もうすこし、この世界に身体が

「さあ、この世界に異体がなれないと、この世界を抜けることはできないんだ」

“ひひするよ……？　こんなに危ないなんて聞いてないんですけど……。

竜はオレたちを襲つてゐる、と言つよりは詩歌だけを狙つていた。だからオレなんかでも避けたり出来てるわけだけど、そろそろ限界だ。

「もう少し……よし、飛ぶよっ！」

詩歌を振り回しながら竜を何とか避けていると、少し離れたところにいた臘がオレと詩歌の腕を掴む。

「…………」

オレは尻餅をついた。臘はオレを見下ろし笑いを堪えていた。

「あれは何なんだ……？」

「ボクは知らないよ……？　けど、小鳥なら……」

詩歌は頭を抱え丸くなつていた。

「ふざけるなっ！　こんな状態の詩歌に何がわかるつて！」

「用見は、男には厳しいよね……」

臘は、はあ、と肩をすくめてみせる。

「人の家の中で騒ぐのは関心しないよ……？」

突然、知らない声が響く。臘がすぐに身構え、オレと詩歌の腕を掴もうとする。

「やめたほうがいいよ。キミのそれ場所が特定できないんだり？」

「…………」

臘は言葉に詰まり。だが、いつでも飛べる体勢をつくる。

「キミのその能力がなんなのか知らないけど。町の連中に見つかるのはまずいだろ？　オレはキミたちの味方をするよ」

「町の連中……？　世界を抜けてはなかつたのか……。

「何のために……？」

臘が淡々と警戒心剥き出しで問いかける。　意外と頼りになる

んだな。

「そここの女の子が知り合いに似てるからかな？　あと、キミたちも  
だけど」

そういうと微笑を浮かべる。

その顔は、オレと同じ顔だった。　正確には、オレより年上の  
オレの顔がそこにはあった。

「僕は、やまなし月見里かげる翔」

そう言つて握手を求めてくるオレ……。

「そうですか……」

呆然と苦笑いするオレを畢は大笑いで指指し、年上のオレは首を  
傾げていた。

詩歌を眠らせて、年上のオレ　　この世界のオレからこの世界に  
ついて聞いた。

この世界では、“ドール”と呼ばれる機械を一人一体以上は  
持つているのだといつ。

さつきの竜もそのドールといつものらしい。

ドールを作る人達は人形技師、ドールを操る人達を機功師といつ  
らしい。

この世界の人々は、ドールを操ることで発展してきたといつ。

戦争はドールを使い、労働などもドールが行つ。

より良いドールを作れる人形技師が称えられ、よりドールの能力  
を惹きだせる機功師が称えられる……そういう世界なのだそうだ。

「それで、町の人たちは何で小鳥に　　あの子に反応して襲い掛か  
つて来たんです？」

畢が、この世界のオレに聞いている。

「それは、オレの口からは言いたくない事件なんだ……。町の連中が勘違いしてキミらを襲つた。それは謝るよ」

彼はオレたちに頭をさげた。

オレはそこにあつた機械 ドール、だつけ？ に興味を引かれていた。

何体かある中で一体だけ、まるでオレを呼んでいるような感覚。「あー、そこにあるドールは主を選ぶんだ。キミも選ばれたんだろう」

う

そういうと彼はそのドールに少し触れ、オレの前に持つてくれる。「こいつは癖があるが凄いドールだ。キミにやるよ」

「え、オレに…？」 けど、金とか持つてないし……

「金はいらない。これはオレが作ったものじゃないしね。それに主を選ぶって言つたら？ 貰つてやってくれ」

くれるって言つながら、もううなづかせ、わざみみたいに狙われるかも知れないし。

「ありがとうござります……」

受け取ると、その機械の目に光が灯り、そのドールはまるで生きているかのような存在感を放ち始めた。

「キミは、何かあるかい？」

彼は皐にも問いかける。

皐は黙つて真っ直ぐ一体のドールに近づく。

「その子か」

そう言って皐にもドールを渡した。

なんか、オレ、かなり良い人じやね？ まあ、別の世界のオレだけど。

オレが貰つたドールは、小さなドーラ「ン。頭の上に乗るへり」のサイズで、四枚の翼を持ち、白銀の鱗に覆われている。

皐が貰つたドールは、精霊のようなものだろうか。赤色の液体が女性のような形を作つていて。その形は、何にでも変化することが

でさぬよつだ。皐がいろいろと詮じて詮していた。

「ゾールにも心はある。特にその子たちは。それだけは忘れないでくれ」

「この世界のオレは真剣な表情になる。

「あ、後で地下室に来なよ。その子たちの戦いかたを教えてあげる

」そう言つて、この世界の翔は歩き去つた。

## Chapter 7

「誰だ……」

皐と地下室へ行くと、この世界の翔と、その後ろに女の子が立っていた。

「来たね。それじゃ、はじめるか……」

そう言って、この世界の翔が歩み寄つてくる。

「はじめるって何を……」

オレと皐はどうやらからか口を開ぐと

「輝夜、桜夜……」

この世界の翔の後ろにいた少女 ドールがぼんやりと光りだす。そして、そのドールの頭の上から桜色の光が皐に向かつて放たれる。

「なにを……！」

「練習だよ。オレは教えるの下手だしね……。何て言うのかな、大切な人への想いをドールへ伝えるみたいな……」

この世界の翔が肩をくろめてみせる。 そんなこと言つてる間にも、皐には桜色の光が近づいてるわけで……。

「颶！」 「紅椿！」

オレと皐はほぼ同時にそれぞれのドールの名前を呼んだ。

この世界の翔が言うように想いを颶へ向ける。

詩歌への想い……。なんだか、胸が苦しくなる。

大丈夫かな……。詩歌の影に別の女の子を感じながら……。

桜色の光が皐に届いた時、水しづきが飛び散ったかと思うと、そこに皐はいなかつた。

そして、何故か皐は翔の後ろのほうへ飛ばされていた。

「不意打ちはしないほうがいいよ。輝夜の仕様は、剛力だから……」

はい……？ 何が起きたのかわからなかつた……。

「あー、やつぱり、キミら2人を相手するのは辛いかもな……」

「「はあ……？」」

オレと臘の声が裏返る。

「キミは、五月七日臘だろ……？」

この世界の翔が臘のほうを見て、次にオレのほうを見た。

「それでキミは、オレか……」

そう言つと、輝夜と呼ばれたドールの上から一体のドールが臘のほうに飛んでいき、輝夜はオレのほうに走つてくる。

「颯！」

オレが颯の名を呼ぶと、颯から銀色の光が四つ放たれ、輝夜を囲み動きを止めた。

「流石だね。初めてでそこまで能力を引き出せるのは凄いよ  
自分で自分のことを褒めてる様で恥ずかしかつたのか、この世界の翔は頬を赤らめる。

「でも、それじゃ、あの子は最上心もがみか……？」

最上……？ 誰だ……。頭が痛む。

オレは知つている……？

「ぐは……！」

オレのもとへ颯が飛んできたりして、オレはその場に倒れ込む。

『ドージー！』

女の子の声が聞こえ、その顔が頭に浮かぶ。

この世界のオレが何か言つてる気がするが無視で……。

オレは……。心つて子を知つてる……？

あの後氣絶したらしいオレは、布団に寝かされていたみたいだ。  
起きたのに気が付いたこの世界の翔は、起きのを待つていたよう口を開く。

「あのや、キミら強いみたいだし。一つ頼まれてくれないかな……」

?

## Chapter 8

「月見、4体ずつでいいよね？」

オレの後ろ 背中合わせになつた鼻が周りの蜘蛛を顎で指す。  
まあ、蜘蛛といつか……。あれは何なんだ？  
鎌みたいな口の機械に足が8本ついている。それもかなりデカイ  
……。

オレなんか丸呑みだねアレは……。

しかも、8体もいるわけで……。まあ、とりあえず

「颶ツ！」

オレの横のドールが銀色の光に包まれる。

そして、その光の中から放たれた4本の銀色の光、それが1体の蜘蛛を貫く。

「えつと、確か……。颶の基本仕様が質量変換で、オレとの能力が呪縛系の技、だっけ……？」

オレは、横の大きくなつたドラゴンを横目に呴いた。  
この世界のオレから教わったことだ。 まあ、半分くらい理解できていなければど……。

「とりあえず、行けえつ！」

オレは、ドールに 風に詩歌への想いを伝えていればいい。  
あれから、この世界のオレと練習してきたよつこ。 勝てたことはないけれど……。

オレたちがこんなことになつてているのは、この世界のオレの頼みを聞いたからだ。  
その頼みの内容は

『1人のドールの顔を見て来て欲しい』

現在、実質上この世界を束ねてているとかいう奴らのところにある

ドールの顔を見て來い、といつのが彼の頼みだつた。

彼は、颯や紅椿の兄弟と言えるドールを集めているらしい。

それらのドールは、オレたちが颯たちを受け取った時に言つていたように『主を選ぶ』のだそうだ。

そのうちの1体であるドールの顔を見て来て欲しいと言つ。

正直、意味不明だつたけれど、彼の表情が真剣だつたから、オレたちはその頼みを受けたのだ。

それで、何で変な蜘蛛に襲われているかと言つと 少し前のことをになる

この世界のオレから戦い方を教わったオレと皐は、巨大な建物の前に立つていた。

「これはデカイな……」

「月見、ビビつてる?」

皐……。男にそんな嬉しそうな微笑を向けられても嬉しくないぞ

。 むしろ、キモイ……。

「ん……? 月見?」

いや、ホント……。

「なんか、あっさり入れてくれたな……」

「コレクターつてのは、コレクションを自慢したいもんなんじゃない?」

「知らん」

「ホント、月見つて男には厳しい……」

皐が何かブツブツ言つている間に、田舎のドールの所まで着いたわけだけど……。

「顔を見てくるだけでいいって言ひてたっけ……？」

オレは多分震えていただろ。田の前にいるそれは……。  
「ボクたちじや、助け出すなんて無理だつて言ひてたでしょ？ それに、この世界の月見でも助けようとして何度も失敗してるので……。この世界のオレがオレたちに頼んだのは、もつ自分がそこに行くことができないからだ。

「だけど……ツ！」

「月見、ちゃんとあの子の顔を見て、笑つてればそれでいいって言つてたでしょ？」

確かに彼女は笑っていた。柔らかそうな頬を朱色に染めて、優しそうな微笑みを浮かべている。

しかし、その胸は開かれ、おそらく心臓にあたるであらひ場所にある歯車、それに棒が刺され歯車の動きは止められている。

やつぱりダメだ。怒りが込み上げてくる。

「なあ、ドールってのは心があるんだよな？」

オレは震える声で皋に問いかける。

「はあ……。しょうがないし付き合つよ」

皋は肩を竦めてみせる。

オレたちのドール 鳴と紅椿が光に包まれたかと思つと、オレ

たちは何処かに飛ばされた。

何が起きたのか考へる暇すらなかつたね……。

ただ、そのとき見たんだ。そのドールの、彼女の首に付けられた首輪を……。

『S.i - ca』

その首輪に刻まれた、彼女の名前……。

## Chapter 9

『 いじは……？』

1人の少女 小鳥遊詩歌が目を覚ましたのは知らない部屋の中だった。

彼女には自分が何でここにいるのかわからなかつた。

「起きた？ あー、頭痛むの？」

「え……？」

そこにいたのは間違いなく翔だつた。 ただ、自分の知つてゐる月見里翔じやなかつた。

なんというか、背は高く、どこか落ち着いた雰囲気で、とにかく、彼女が知つてゐる翔よりも年上なのだ。

「あ、オレは月見里翔な。えっと、大丈夫か？」

自分がずっと頭を抑えてゐることに気付いたのはその時だつた。この翔は自分の事を知らないみたいだ。それなら、いじは元いた世界じやないのだろうか。

詩歌は頭を抑える手を外しながら、そう思つた。

「あ、私はたか」

「名前は言わなくていいよ」

そう言つて彼は、詩歌のことをどこか懐かしむような、温かい優しい目で微笑んだ。

詩歌は自己紹介も出来なかつたことを歯痒く思いながらも彼に黙つて微笑み返した。

たとえ、彼が詩歌の知つてゐる月見里翔じやなかつたとしても、翔のすることは信じられる。詩歌にはそう思えた。

「それじゃ、オレは行くよ。少ししないといけないことがあるから」

そう言つて彼は立ち上がつた。

「あ、君はこの家から、いや、この部屋から出ちゃダメだよ。あと、暇だらうけど、テレビもラジオもつけないでくれ」

立ち去る彼はそう言い残し、部屋から出て行つた。

ゆっくりと閉まるドアの隙間から、黒い着物を着た少女が彼に付いて行くのが見える。その頭には、着物とは不釣り合いな大きな帽子をのせている。

「あはは……、かなり怪しいでしょ。部屋から出ないでテレビもつけちゃダメって……」

完全に閉まつたドアを見つめながら、詩歌はそう呟いた。  
しかし、彼女は、この部屋から出ないで彼の言つことを守るだろう。

あれが知らない人なら、すぐに逃げ出していくだろうけど、あれは翔なのだから。

いや、まあ、知らない人であることに代わりはないのだけれど……。どんな翔でも翔のすることは信じたいと思つから。

「それにしても、私は何でここにいるんだろう……」

自分の記憶を整理してみる。いつものように翔と臘の3人で演劇の台本を書いて……、確か完成したんだ。それで……。  
そこから先のことは思い出せなかつた。おそらく、その時にこの世界に来たのだろう。

もしそうなら、あの時のように翔と臘も来ているのだろうか。  
それならどこ……？

……。  
いくら考へてもわからなかつた。わかるわけもないのだが……。

とりあえず、自分のいる部屋を見渡してみる。やつぱり、そこは知らない場所だ。

と、頭をかすめる黒い着物を着た少女とその帽子。やはり詩歌には見覚えのない人だつた。

けれど、詩歌は、それがあの人じゃないことを知つていた。あの

人はいつも一人だったから……。

「あの人って誰だよ……」

詩歌は再び頭を抱え、目を閉じ横になつた。

「とりあえず、行けえつ！」

蜘蛛を貫く4本の銀色の光のうちの1本が大きくなり。残りの3本は蜘蛛から離れ、もう1体の蜘蛛を貫く。

ここまでには上手くいっている。けれど、皐は大丈夫だらうから敵はあと2体……。

正直、2体以上の呪縛は出来ないし、オレと颯にドールを傷つける力はない。

「颯、急いで……」

1本の銀色の光で貫いている蜘蛛のほうに力を込め、その光が強くなる。

いつものことじで、ドールをしばらく停止させることが出来るとか。「あと、少し……」

動きを封じていな、残り2体を横目に見ながら。嫌な汗が流れ落ちる……。

「へ……？」

突然、蜘蛛が後退し始めた。皐のほうも同じらしい。

「えっと……」

えっと、そこに固まってる2体の呪縛も解いたほうがいいんでしようか……。

「へえ……。キミのそれすごいんだねえ……。私の力でも動かなくなるんだ……」

なんというか、とにかく甘ったるい声が聞こえて来る。

そして、さっきの蜘蛛、皐が倒した1体とオレが動きを止めている2体を抜いた、5体の蜘蛛が飛び上がった。

オレたちに襲い掛かるかと思ったら、颯の力で縛られている蜘蛛2体を壊し始めた。

「何を……？」

「次はキミたちよー……」

甘つたるい声の主が見える。美しい黒髪をした背の高い女性だつた。その肩に乗ったドールは、小さな蜘蛛だ。普通の蜘蛛よりは大きいのだけど、今まで戦っていた蜘蛛よりは断然小さい。

5体の蜘蛛がこちらを向く。と、同時に紅色の霧が広がつた。

皋の紅椿だ。相手にはこちらの位置がずれて見えたりとかするらしい。

「とりあえず、オレたちは盾でいいよな？」

「だね。月見はボクのことしつかり守つてよ」

軽くウインクして走り出す皋……。お前、今は男だぞ……。

皋が紅椿で敵を翻弄し、ナイフで相手のドールの急所をさす。そして、オレは颯の4枚の銀色の光を盾にして皋を守る。それがオレたちに出来る戦い方だ。

皋は、いろいろな世界んいいけるよになつて、ある世界で護身用にナイフでの戦いかたを覚えているらしい。かなり強いんじやない……？　さつきの戦いでの蜘蛛の急所も見定めてあるみたいだし。

しかし、敵の5体の蜘蛛はさつきまでとは違いかなりの連携だつた。

皋はなんとか1体を倒したが、それ以上倒すことが出来ずにいた。「ちょっと、やばいかな……。相手は人形でボクは人だよ。体力が……」

皋が弱音を吐き始めた時

『えー、あー……』

どこからかノイズが聞こえ、続いて聞こえてきたのは、間違いないオレの声だつた。

『えー、あー……』  
スピーカーから聞こえてきたのは、間違いなく月見里翔の声だつた。

『Sue - cia』というドール……。いや、少女のことを思い出して欲しい。

彼女のことを知らないという人はいないだろう。彼女は人間に近づきすぎたドールとして、世界中から罵倒され続けた。

確かにオレも彼女のことを壊そうとした。べつにそのことを悔いてはいないし、今さら許して欲しいとも思っていない……。

けれど、やはり間違ったことだったとは思う。これを聞いてくれている人の中にも過去のことにはか思うところがある者もいるはずだ。

それでも、世界が彼女を認めようとしない。そのせいで、誰も彼女を認められないでいる。

だから

もう一度考え方直して欲しい。彼女が本当に……。

本当に、存在してはいけなかつたのかを。

人型のドールならいくらでもいる。

心をもつたドールだつて……。といつか、どんなドールにだつて心はある。

自分のドールを見てみなよ。そいつは、あんたにとつて何なんだ?

共に戦う 仲間、相棒、友……?

愛情を注いだ 家族、息子……?

皆が自分のドールを大切に想うように最上心もがみ うらという少女もS.i - caを大切に想っていた。

最上心は、べつに神に近づきたかったわけでも、決してなりたかつたわけでもない……！

ただ、友達が欲しかつただけなんだ。

心が……、あいつがどんな想いでドールを作ったのか、誰も知らないだろ……。

あいつは、人形技師としても機功師としても完璧すぎた。あいつは、1人が好きだから、1人でいたわけじゃない。

あいつが1つのチームにつけば、戦争がおきる。

あいつが誰かと仲良くなれば、そいつはたくさんのチームに狙われることになる。

そうやって、あいつは1人でいるしかなかつたんだ。誰もが身に覚えのあることだろ……。

だから、少しでも……。変わりたいと思うなら。オレを手伝ってくれないか……？

オレは、S.i - caを助ける。たとえ、世界が変わろうとしないのなら

オレは世界を敵にまわしても、S.i - caは助ける。それで、もしどうできるなら、それで世界を変えるよ。

人もドールも傷つかないでいられる、戦争のない世界を……

！！！

最後になつたけど、オレと戦つてくれる人は、ここ 電波塔前に集合。時間はどれだけかかるてもいい。  
それじゃ、待ってる。

それは、とても文章とは言い難い言葉だつたけれど。  
その文章でちゃんと伝わるとは思えない。そんな文章なのに。  
それは、どこか暖かく、頭ではなく心に伝わってくる。響く、と言つた感じだろうか。

けれど、人を動かすのは、そいつた言葉なのかもしれない。  
現に……。いや、わざわざ言つ必要もないだろう。  
まあ、強いて言つなら、この行動が世界を変えることになる。それも他の世界を巻き込んで。

町中の人々は、テレビの砂嵐、ラジオのノイズ……。そして、  
自分の作ったドール、自分と共に育ってきたドール、共闘してきた  
ドール……。

それらを見つめ、小さく、とても小さく頷いていた。

暗がりの中、ラジオの音と2人の話し声だけが聞こえて来る。  
「ふう……。あいつ、やつとふしきれたみたいだね。行こう、水月」  
紅い瞳の青年と、白い髪、白い着物を身に着けた少女が立ち去り、  
ラジオのノイズだけが静寂を破っていた。

そして……。

「ふふ……。やるわね、キミへ。」

甘つたるい声が響く。

紅い霧がたくさん蜘蛛を包む中、それは翔へと向けられて  
いた。

「な、何を……？」

「だから……。キミも今放送室を占拠してゐる子も同じ、キミでし

よ  
?「

それは、翔たちが同じ存在であることを確かに理解していた。

「同じ、キミでしょ？」

紅い霧の中でその言葉がオレの頭に響いていた。

しばらくの沈黙、紅い霧が服にまとわりついて気持ち悪い……。

いや、実際には、その霧は臘の操るドールなのだ。服にまとわりついたりしてゐるわけがない。

ただ、目の前にいる彼女の存在に威圧されてるのだとオレに気付く余地があつたのだろうか。

と、黒くて長い髪をもつた彼女は真っ直ぐオレに近づいてきた。臘の紅椿の力は確かに発動しているにも関わらず、真っ直ぐオレのほうを見て近づいてくるのだ。

その長い黒髪が指先をかすめた気がした。すると

「ふふ……。私が何者なのかって？ そうね……。神……？」

この女は何を言つてるんだ……。神つて、神様とか言われてるアレだよな……。

「えつとね。この世界ではないけれど、最初の世界？ それを作つたのが私なの」

彼女は真っ直ぐにオレを見つめ、全てを見通していくような目でオレに微笑みかけた。

「まあ、信じなくていいけどね。それじゃ、行きましょうか。ここ  
のキミが待つてる所へ」

オレが待つてる場所……？

余計なことを考える時間なんて全く無く、糸のようなものが身体を通つたかと思うと目の前は光のようなものに包まれた。

電波塔を占拠していた青年

やまなし  
月見里翔

は電波塔前の広場を見下

ろし、ただ呆然とその光景を眺めていた。

かなりの数の人が、ドールが、集まつて来ているのだ。その数は百や二百じやきかないだろう。

これだけの人数が自分の話を聞き、賛同して集まつてくれたのだ。世界はこんなにも簡単に変えられてしまうものなのだろうか……？

「とりあえずは、大成功つてことかな？」

そう言つと翔は、窓から外へ飛び出した。

結構な高さのところから飛び降りた彼を見つけた何人かが彼を指差す中、ふいに空気が揺らいだ。

気が付くとそこには2人の少年が、そしてその周りに現れたのは、現在この町を実質的に束ねているチーム、そのチームの所有する蜘蛛型のドールだった。

つまり、自分たちが助けようとしているドールを捕らえているチームのドール やはり敵はやつてきたのだ。

何体かのドールが飛び出しが何かがおかしい。蜘蛛が避けようともせずに落ちてくるだけなのだ。

そして しばらくの後、電波塔前の大衆には怒りが溢れ帰り、それは混乱という言葉がふさわしい、仲間割れとしか言いようがない事態に陥つっていた。

「あの女何をしたんだ？」

混乱の中心で2人の少年が息を潜めている。

「知るかよ……」

「ホント、月見は男に厳しい……」

まだ、そういうこと言つのかよ。

「で、どうするの……？」

「どうするつて言つたつてなあ」

「どうしようもないだろ……。周りじゃ、ドール同士の喧嘩が始まるし、それも百人単位の喧嘩だ。正直、オレにはどうにもできない。

「ふふ……。それじゃ、もう一回、会場を変えようか……？」

それはもう聞き慣れた、甘つたるい声だ。

すると、蜘蛛の糸がオレと臘を同時に通り……。

次にオレがいたのは、詩歌に似たあのドール、その目の前。まわりにいるのは、オレと臘、この世界のオレ、そして、紅

い目をした美青年、五月七日臘つよづにわらきだつた。

それと、それぞれのドール、他にもたくさんの動いていないドールたちが周りに置いてあつた。

「一人、呼んでない子が混ざつてるみたいだけど、まあ、別にいいわ……」

甘つたるい声と共に現れた彼女の周りには、1体の小さめの蜘蛛を除いて、ドールは1体もいなかつた。

「あの、蜘蛛には氣をつけなよ。ちつとの混乱を起こしたのはあの蜘蛛だ」

この世界のオレはそれだけで伝わると思つてこるのでうつか……。長い黒髪をなびかせた彼女は薄く微笑んだ。

「それにしても……」

「ここはどこだらう？ 確かに知つてゐるはずなんだ。

そんな脳裏に浮かぶのは、あの黒髪の女の子……。

それと、あの帽子 桜夜だ。それでも……。

「だから……。あの人つて誰なんだよ……」

誰もいない部屋の中で一人、詩歌は頭を押さえ、ただ閉まつている扉を見つめていた。

「ここが……私の世界」

知らないけれど、知つてゐる世界。私はここに歸るべきなのかも知れない。でも……。

『詩歌は自分の世界を探して、そこに歸りたいのか？』

翔が口にした言葉……。

「そんなのわかんないよ……」

この世界に来れば、この胸の痛みは消えると思つてた。なのに

……もつと痛くなつて、苦しくて……。

『仮に詩歌がこの世界の人じやなかつたとしても、詩歌はここにい  
ればいい』

私はいてもいいのかな……。

私の居場所はどこにあるの……？ 私は……。

シトシトとした雨が室内に降り始め、だんだんと激しい雨に変わつていく。

この世界の皋のドール 水月の能力らしい。それからは、何がおきたのかわからなかつた。

この世界の皋が見えなくなつたと思った瞬間、周りにいるドールたちの中から8体のドールが動きだし、気が付けば皋と水月は8体

のドールに囮まれて倒れていた。

「キミたちは、戦おうとするなよ。次はオレが行く」

この世界のオレが前にでると、共に前にでた輝夜と桜夜が薄い光に包まれて……。

『その子は輝夜、今そこにいる水月の姉妹機よ。あなたが望むならあげてもいい。けど、この子を扱うのは難しいわよ?』

ドールと呼ばれる機械を使役する世界、その世界の翔と輝夜、そして皐が出会ったのは何年か前のことだった。

『どこのチームにも属さない最高の人形技師がいる』 ただ、力を求めていた頃の翔は、この噂に何かを感じ、その人形技師を探し続けた。

その人は、案外簡単に見つかった。

2体のドール、1人の少年を連れていた彼女は、翔の話を適当に聞くと、翔を真っ直ぐ見据え口を開いた。

「力が欲しい、ねえ? その子は輝夜、今そこにいる水月の姉妹機よ。あなたが望むならあげてもいい。けど、この子を扱うのは難しいわよ?」

それは翔にとって予想外な言葉だつた。そんなに簡単に渡していくドールなのか……? ホントは凄くないんじゃ……? そんな疑問が頭をよぎる。

「タダでいいのか……? ドールは2体しか連れてないみたいだけど」

「んー? ドールってのはね。主を選ぶの特に私の……」

そこで、言葉を詰まらせ、首を横に振ると、言葉をたした。

「私と私の唯一の弟子、私たちが作つたドールは主を選ぶ。だから、あなたが輝夜の主になるべき人なら、あなたが持つてるのが普通でしょう?」

「それって、あんたらの作るドールに心があるってことか?」「ううん。それは違う、私たちのだけじゃなくて、どんなドールにも心はあるの」

彼女は優しい目で真っ直ぐ翔を見て言い放つた。

「どんなドールにも……」

翔は真剣にその言葉を受け止めようとしているのが彼女にもわかつただろう。

「んー? キミはドールを扱う時どうやってドールと繋がるの?」

「そんなの、じつ……氣を飛ばす感じで」

「そうね。ここにいる人たちとは、みんな感覚だけでドールと繋がることができる。でもね、あれはドールと気持ち 絆を共有してるの」

気持ち、絆の共有……? そんなの翔は聞いたこともないことだ

った。首を傾げる翔に彼女は再び言葉を繋げる。

「簡単なことよ。あなたの大切な人への思いをドールにぶつけるだけいい」

そう言つと、彼女は微笑み。翔に輝夜を渡した。そして……

「そうね。そこにいる子が水月が選んだ人。戦つてみるといいわ。私もあなたがホントに輝夜にふさわしいか確かめられるし」

その言葉を聞くと、そばにいた少年が一步前にでた。その少年はキレイな紅い瞳をしていた。

輝夜と呼ばれているこの人型のドールは確かに人形なのだけれど、まるでそこに生きているかのようだった。

近くで見、触れてみれば、たいていの機功師は気付くだろう。この子は、並のドールじゃない。当然、この子を作った人形技師彼女も並の人形技師ではないだろう。

彼女の話も本当だということだろうか……。

「そいつが気に入ったなら早く始めよっせ。水月を貰つた時から、輝夜と相手してみたかったんだ」

翔と対峙するように立つて立つている少年 露は、その紅い瞳を輝かせ楽しげに笑みを浮かべていた。

そして、その横にいるのが水月 まるで、輝夜と対照的になつていて、輝夜の姉妹機だ。

輝夜が黒なら、水月は白、そんな印象を受ける、2体の姉妹。まあ、髪の色やら着ている着物がそうなのだから、おそらくそういうつもりで造られたのだろう。

黒髪に黒い着物姿の輝夜と淡い水色の髪に白い着物姿の水月。その姉妹は美しく、何か惹かれるものがあった。

「えっと、輝夜……？」

翔は輝夜に気を向ける。しかし、輝夜はそれに応えてはくれなかつた。

『大切な人への想いをドールにぶつけるだけでいい』

気持ち絆の共有……。すると、輝夜が薄い光を放ち始めた。

「ふーん。初めてでそれだけの力を出せるんだね。じゃあ、始めようか水月」

同じように水月が光を放ち始め、その光は淡く露をも包み込んでいく。そして

目の前にいた いや、いるはずの露と水月の姿が見えなかつた。

これが水月の能力……？ こんな能力聞いたこともない。

「水月の基本仕様は、隠密、つまり気配を消せるの」

気配を消したところで近くに隠れるところなんてない。姿が見えなくなるほどにその能力は完璧なのか……。

「それじゃ、輝夜のは……？」

「それは秘密。その子が欲しいなら自分で見つけなさい」

彼女はそう言いながら微笑んで、オレたちのことを優しく見つめている。

見えなくても、攻撃の瞬間なら相手の場所がわかるはずだ。それに、それだけの能力を積んでいるなら、攻撃に関しては、それほど特化していないうはず……。

翔はそう思い、さらに輝夜へと想いを向ける。

しかし 力の差は圧倒的だった。目の前で踊るように傷ついていく輝夜に翔は胸を熱くするだけだった。

想い……。大切な人への想い。翔は、藁をも掴むように、その答えを探した。翔には心から大切だと思える人なんていなかつたのだ。しかし、目の前の光景は我慢できない。翔は奥歯を噛み締める。大切な人なんていないけど、誰かが、輝夜が傷つくのは、嫌だ。

その時、輝夜の感覚、というのが適當だろうか。そういうものが細部まで伝わってくるような気がした。

「あの子たち、合ってるみたいね。まあ、だからあげたんだけど」遠くから彼らの戦いを見守っていた彼女は少し浮かれた調子でそういった。

「輝夜は月をも穿つ剛力。 水月は水面に映える月。あの子たちは、水面に映える月さえも穿つことがでいるのかしら」

そして、彼女は楽しげにその場から離れていく。

その表情は、嬉しさとも安心とも、ましてや、悲しさや寂しさ、とも違う、決意にも似た表情で口元を固く結んでいるようにも見え

る。

おそらく、この世界のオレ 翔は苦戦しているのだろう。  
2体のドールで8体のドールの連携を抑えているのだから、無理  
もない。

そんな彼に疲れの色が見え始めた時、8体のドールのうち2体が、  
さらにもう2体、計4体のドールの動きが止まつた。  
何が起きたのかはわからなかつたが、おそらく倒したのだろう。  
隣にいる皐も何が起きたのかわからないといつ様子で、その紅い瞳  
を興味津々にその戦いへと向けていた。  
その時、周りに置かれているドールが動いたことに彼女、いや彼  
は気付いただろうか。

ここは、無数のドールが置かれている、ドールの保管場のよ  
うな所だ。

そして、オレたちが対峙している女、そのドールの8本の脚は、  
8体のドールを操ることができた。  
つまり敵は、ほぼ無限にいる軍隊のようなものだ。不幸なことに  
オレたちのなかに動かないドールを攻撃するだけの度胸のある奴も  
いない。

そんなオレたちに、この軍勢を切り抜くことは、難しいだろう

……。

目の前で私に似た誰かが息をなくす。鮮明に思い浮かぶその景色に詩歌は息が詰まる。

私は自分の世界を求めた。そこが見つかってしまった後のことなんて考えてもいなかつた。

私の居場所……？ ノコじゃないことだけは確かなのだろう。世界から拒絶される感じ。私は自分の世界から逃げ出したんだ。逃げる場所を探して、そこに逃げ込んだ私が受け入れられるわけがない。受け入れられて良いわけがない。

「私は、私は……。あのを殺した……？」

「あの 人 私に似た誰か……。私はの人を殺して、自分を壊したという事実。

詩歌自信なんのことだかわかつていないのでどう。

忘れていた記憶の断片がノコにいることを詩歌の存在を否定してくれる。

そして、もう一つの記憶。月見里翔と過ごした誰かの記憶。その記憶の断片が詩歌の目を熱くさせる。

『ゴメン。ゴメンね……。翔、大好きだよ……？』

その記憶の持ち主である彼女の周りには涙で濡れた書きかけの手紙が何枚も破られていた。

詩歌には、その記憶の中の手紙を読むことはできなかつた。読めるわけがなかつた。

「私は誰でもない誰か……」

詩歌は混乱する記憶の断片の中に自分の存在を確認できずにいた。「…………探そう」

この世界の翔には申し訳ないが、詩歌は部屋をでることにした。自分がなくなるのは怖いから。自分の世界が私の居場所でないのなら、今度は居場所を探そう。

最初は躊躇し、けれどしつかりと部屋を後にした。

「臘、あつひ行ってお前も戦つてこよ。休んでばつかじやいられないだろ?」

オレのそばにいるよりも、この世界の翔と臘、あいつらのそばにいた方が安全だろ?。だから

「あー、そうだね。でも、用見は?」

「いや、ちょっと、腰抜けちやつて……」

肩を竦めて、あははと笑つてみせる。

「それなら、ボクが用見を守らなきゃ」

「いや、いいよ。向こうも逆転してきたみたいだし、こっちに構つてる余裕ないだろ。それに、男に守られたくない」

臘は少し怒つたような顔になつたが、そんなことを気にしている余裕はなかつた。背中を流れる嫌な汗を隠すのに必死だ。

「むー、ホント男には厳しいよね。ちゃんと隠れてなよ!」

臘はそう言つと、紅椿で身を隠し戦闘に加わつて行く。

向こうで動いている敵のドールは5体、つまりはこいつに3体いるつてことか……。

できるだけ静かに颶の四枚の銀色の光を盾状に展開する。 と

同時に周りのドール達のなかから3体のドールが動き始める。

それらの攻撃を四枚の盾で防ぐ。ギリギリだけれど、自分の身を守ることくらじでできるはずだ。隙があればしば、颶の力で縛つてしまえばいい。強制支配がきかなくなるとか何とか言つてたしな。

「ふーん。臘ちゃんは逃がしたんだねえー……。やっぱりキミたちはイレギュラーだよ……」

独特の甘い声が近くに聞こえる。近くにいる、といふが、すぐ後ろにいる……。

嫌な汗が身体中からあふれ出し、いろいろな言葉が喉で詰まつててこない。

「どうして、あの子を捕まえているかって？ それは、世界を守るために。わたしのぎむだからねえ」

まるで、すべて見透かされているように彼女は話始めた。

「世界は自らの変化に耐えられないでいる。最初、世界は一つだった。でもね、分岐し、様々な世界に分かれ、その力を失つていった。もう世界は耐えられないかも知れないの」

いつからか、その声に独特の甘つたるさはなくなつっていた。

「今この世界に新しいものを作る力なんてないの。まあ、もともと新しいものが生まれるなんてイレギュラーだったのだけれど。ただ、他の世界と同じ人が少しずつ違う、けれど同じ生活をする。それが今の世界たちのありかたなのね。けど、そんな世界に生まれるはずのない命が2つの世界にだけ、2人生まれてしまったの。その子達を調べれば、世界を救う手立てになるかもしれない。世界を作つてしまつたものとして、それは義務でしょ？」

義務……？ 世界を救う手立て……？ それらの言葉が頭の中を駆けずり回る。

その中でも、2人と彼女はいったのだ。1人は詩歌のこと、目の前にいる彼女のこと、彼女達は“1人”だ。なら、もう1人は誰のことだ……？

「…………月乃輝夜。彼女は人間になるはずよ」

そう言うと、もう1つの戦闘を見る。

「なら……、世界を救いたいなら、こんな……」

「無理矢理しなくてもいいって？ 私はね、不器用なのよ。誰かと手をとるなんてできないの。そんなの間違ってる、とか思わないのね？ あなたは強いのか弱いのかわからない。あなたは何でココに来たの？」

「オレは……」

「意味もなく世界を越えられるのは強さなのかしらね」

これを会話というのだろうか……。なんだか疲れる。1つ気が付いたことがある。彼女はオレたちをイレギュラーだと呟つたのだ。

つまり

「そうね。状況を開拓できるとしたら、彼らの強さじゃなくて、あなた達の力。そして、それなら、私は止められないし、あなたにはなら可能なはずよ」

ため息混じりに敵にお墨付きを貰ってしまったのだが。彼女が可能だというのなら、可能なのだろう。

四枚の銀色の盾で敵3体を弾き飛ばすと、颶の質量変化を颶の翼

四枚の銀色の光に適合させる。オレは、詩歌と臘と、3人で元の世界に帰りたい。そのついでに口の詩歌も助けられるのなら、それに越したことはないだろう、と。ドールの力 大切な人への思いを颶に集中させて。

「私の負けみたいね……」

四枚の巨大な光は全てのドールを包むと強制停止ではなく、全てのドールにオレとのつながりを共有させる。複数のドールを操ることはできないが、他のつながりを断つだけの力を質量変化で補うことは可能だつたらしい。

「そのドールの力じゃないわよ。それがあなたの強さ」

彼女はクスクスと微笑むと、彼女の肩にのった蜘蛛から4本の糸のようものが放たれる。

2本は、この世界の翔と臘を。1本は臘を。もう一本はオレを突き抜ける。

そして世界が暗く、どこまでも落ちていくような浮遊感に包まれる。

「ふふ、あなたは絶えたのね？」

肩に蜘蛛を乗せた彼女の視線のさきには、自らの汗でビッショリと濡れた大人の翔の姿だけがあつた。

「他の奴らに、何をした？」

「臘くんには、恐怖を。臘ちゃんには、絶望を。もう1人のキミに

は、幸せを。そして、あなたには、希望を『えたつもりだつたんだ  
けどね』

「何で、この子が『』にいるのかわからない、といった顔で翔を見

つめる彼女は面白そうに口元を歪めた。

「偽りの世界の希望にすがるほど、オレはやわじやないみたいだからかな」

「ちゃんと、心に触れて、一番染みるのにしているんだけどね」「ね  
大袈裟にため息をついてみせる彼女に、この翔は苛立ちを隠せない様子だった。

「それじゃ、キミにも絶望を『』えてみようかしらね?」「…

翔は身構えるが、それを可笑しそうに彼女は微笑み……。

「違うわよ。一つ教えてあげるだけ。 キミは、心ちゃんを助けられなかつたことを覚えていたわよね?」

それは、この世界の出来事ではなくて、別の世界での翔のことだ。翔にも、別の世界からきた自分に会つことで確信していたことだつた。だから、一言だけ呟いた。

「やつぱり、そなんだな」

「それね、心ちゃんが幼くして死んでしまう世界には条件があるの。心ちゃんが死んでしまうのは半々くらいかな。 その条件はね、

キミと出会うことなの」

翔の胸に、様々な最上心の顔が浮かんだ。それは翔の知っている

もの、知らないものも含まれていた。

「な、それって……」

「どんな世界でも、最上心と円見里翔が出会つてしまつた世界では最上心は幼いうちに死んでいる。ちなみにね、キミと出会わなかつた最上心は幸せに暮らして、年老いてその人生を終えている」

心にぽつかりと穴が空くような感覚が翔を襲う。

「それで、あいつは……、別の世界からきたオレは……?」

「最上心と出会つてるわよ。彼らが幼いうちに、最上心は自ら命を絶つている。おそらく、そのショックで翔は過去の記憶を失つてい

るみたいね」

「……」

歳は小学校高学年といったところだろうか  
の実家に来ていた。翔の住んでいたところから、だいたい半日から1日くらいかかる距離にあり、長期休暇の度に来ていた場所なのだ。

が……。

なんだろう……世界とズレている感覚といつのだろうか。確かに昨日までの記憶はある。だけど……。

と、翔の頬がほんのりと赤く染まる。

『はあ……。頭でも悪くなつたのだろうか。……いや、もともと悪いか』

照れ隠しなのか、心中でため息をつき頭を振る。雪で凍つた狭い道を抜け、待ち合わせである神社へと足を進める。といっても、母の実家からは田と鼻の先なので、ほとんど歩かないのだが。

「べつに待ち合わせる必要ないと思うんだけどな」

呟くと、やはりその頬を赤く染めた。

もがみ  
うら  
最上心、彼女との出会いは、奇跡だったのかも知れない。

たまたま彼女が母の実家の近くに住んでいて、たまたま話して、たまたま同学年だつただけのことだった。

こういうのを人は運命というのかも知れない。気が付くと翔は心を好きになつっていた。

本来なら出会わなかつたかもしれない。すれ違うだけだつたかもしれない。……いや、すれ違うだけだつたはずだ。一緒に話して、仲良くなつて。そんな偶然が

今、誰かに運命を感じるかと聞かれたら、素で信じたいと願望系の返答をしてしまうことだろうと翔は思った。

しかし、翔はその想いを伝えることはできないと、隠さなければ

ヤマナシ  
カケル  
月見里翔は、母方

いけないと、幼心に理解していた。

遠すぎるのだ。半年に一回しか会うこともできない人にこの想いを伝えてしまつたら……。そう想つていたのだが

そんなことを考へている間にも、翔の頬は赤くなっているわけだが。そういうしている間にも目的地だった神社に着き、手ごろな木に腰をかける。

「やつぱり来てないか……」

細い道路を挟んだ先にある家を見ると、その視線を神社内の空き地へと、そして自分の掌へと移す。

昨日のことを思い出し。すでに赤くなっている頬を更に赤く染め上げる。

昨日はいつものように といつても半年に一回ほどの母の実家に滞在している間だけなのだが、この町に住んでいる友達と鬼ごっこをしていた。

翔が鬼で心を追いかけていた時だつた。翔は転び、心は手を差し伸べてくれた。

その手をとると その、なんというか、告白……？ サれたのだ。

一瞬戸惑い、そしてゆつくりと小さく頷くことしかできなかつた。だから、今日は伝えようと思う。好きだつて伝えてもいいんだとわかつたから、今まで我慢してきた想いなのだから。翔はそう決意して、心を待つた。

「やつぱり待ち合わせる必要なかつただろ……」

集合時間になつても現れない心に咳いた。そして、さつき見ていた家を見る。  
ドタバタという音が聞こえてきそうな気がして、翔は頬を緩ませる。

やはり、ドタバタと乱雑に玄関の扉が開かれ、心が満面の笑顔で手を振つてきた。

遠くでトラックが走る音が翔の耳に届き、何か既視感のようなものに襲われる。

『だめだ。来るな……！』

叫ぼうとした。いや、叫んだのだが言葉にならない。

心は道路の脇まで走り寄ると止まつて手を振つてくる。少し頬が赤い気がするのが何だか嬉しかったのだが、トラックの近づく音によつて胸が締め付けられるような痛みに襲われる。

そして 翔と心の間を走り抜けたと思われたトラックは、スリップしこんな細い道では行き場もなく、ただそこに横向きに倒れていた。

心が立つていた場所にはトラックの積み木であらうものが散らかつているだけだった。

そして、救急車やらパトカーやらの音が聞こえ、救急車が去つていつても、翔は動けないでそこにいた。ただただそこで見ていることしかできなかつた。

「何ぼーっとしてるのさ?」

不意に明るい笑顔が顔の前に近づけられる。短めの黒髪で、大きな瞳や笑顔が何とも活発そうな女の子の顔である。

それは、間違いなく最上心のものだつた。前にある細い道の先を見ると、先ほどのトラックが何もなかつた様に通り過ぎていた。もちろん救急車やパトカーが来た形跡もない。

ナンダツタンダ……？ やはり頭でも悪くなつたのだろう。

大きく頭を振ると、田の前の女の子に微笑んだ。

「 」

間違えようもなく、幼い自分が迷い込んだ自分の世界の何処かの時間軸であることを女の 本来の姿である皐は知っていた。

あの時のこと忘れられるわけがないと皐は思つた。それが自分の生きる糧で望みであることを彼女は知つていたからだ。自分の淀んだ瞳を想像して頬が緩む。

あの時、あのままだつたら自分はどうなつていただろうと考えると皐は笑わずにいられなかつた。こんな性格になれたのもあの時があつたからこそなのかも知れない。

「 ボクは……。間違つた存在なの……？ ボクは、なんなのぞ……」  
不意に聞こえたその声は、まだ幼いころの自分のものだと皐はすぐにつかつたが皐は黙つて見守ることに決めた。だつて、あの光おそらく月見里翔であろう、その人が助けてくれることがわかっているから。

だから、頬を緩め優しく微笑んでいることができた。

そして、皐のそのキレイな紅い瞳が濁つてしまつたあの時のことを思い返した。

その日もいつものように世界を越えた。まだ幼かつた皐は不定期に訪れる、その世界を越える瞬間が楽しみでしかたなかつた。自分は他の人ができないことができる。他の人が見ることのできない世界を覗き見ることができる。そのことが楽しくて、ただただ嬉しかつた。

けれど、その日はいつもと違つていた。普段なら男の子の姿になつてしまつ皐の身体が元の姿のままだつたのである。

だからといつて、あまり氣にも留めずに世界を見てまわつた。この世界は、自分のいた世界に似ているタイプの世界だつた。ファンタジーな世界がお気に入りだつた皐は少々不服だつたが、自分の知らない世界には変わりないので冒険をしつかりと楽しんでいた。

しばらくして、一つの傷を見た。

その傷は、皐が付けた傷だった。

もしも、元の世界がわからなくなつたりと、世界を越えるということが一度だけ怖くなつたことがあった。その時に自分の世界の目印に付けた傷だ。

つまり、その傷は世界を越えることができる皐　自分がだけが付けることができる傷だ。

それが意味するのは、もちろん　「」が自分の住む世界だということ。

少し様子が違うのは、過去か未来か、おそらく未来だからだろう。

そのことで気付いてしまったことがあった。自分が男に生まれるべき、間違つて生まれてきた存在なのだと。

それなら、今、女の姿のも、男の姿になつてしまつとも理解できる。

自分以外の皐が男だから、世界はそれに合わせて皐を男にしていたんだ。生じる誤差を減らす。そういうことなのだろう。

それに、自分が女だから、間違つている存在だから、自分は世界に縛られないのだろうと確信した。

自分の好きだった能力がまさか、ただのバグだったなんて……。急に居場所を失つた気がした。

ただ適当に彷徨つて、一つの学校に入った。なんとなく廊下を進み、奥のほうにある教室に入ると床に座り込んだ。

休日なのだろうか。人のいない少し薄暗い学校は、その時の皐には居心地がよかつた。

だんだんと膝を丸め、ついには膝を抱えて頭を埋めた。

その時の皐の紅くキレイだった瞳が暗く濁つていたことは言つまでもないことだ。

「ここは……」

男の臈である彼が立っていたのは、一度と来る事はない、来たくないと思っていた。彼の故郷にあたる場所だつた。

彼はただ懐かしいようなその町を歩いていた。

ただココにいるだけで苦しくなる、熱くなる目が彼を不機嫌にさせた。

当時、まだ子供だった臈は自分は1人なのだと信じていた。

同年代の子供たちからは「ウサギの目」と馬鹿にされ。

大人たちからは「魔眼」だと忌み嫌われた。

彼を生んだ親でさえも、彼の赤い瞳を嫌っていた。

そして、彼は1人でいることを選んでしまった。

そんな時に出会つた1体のドールにだけ自分の思いを伝えていた。

彼の機功師としての腕はかなりのものになつていった。

自分を認めてくれるものがみつかつたと思ったのか、紅い瞳の少年はただ強くあらうとした。彼の非凡な才能もそれを後押ししてくれていたのだろう。

けれど、彼の両親も町の人々も認めてはくれなかつた。

彼の両親は、町の人々に愛される人形技師だつた。彼らが作るドールは戦闘用ではなく家事などの生活に用いられるドールだ。

そして、この町は機功師のいない人形技師だけが住む町だつた。

彼が力をもつたために、やはり彼は「魔眼の子」と呼ばれるようになつっていた。

そして彼は町を捨てた。いや、町から逃げたと言つた方が適当だろう。町から逃げ、過去から逃げ続け、気が付くと彼は最強の機功

師と呼ばれるよくなっていた。

小鳥遊詩歌は、人の気配のしない町の中を頭の痛くなるぼうへと、ただただ走っていた。

いろいろな記憶の断片が詩歌にそうさせていた。痛む頭を抑えることもせず、ただただ走り続けていた。

「私の居場所なんてどこにもないのかな……」

彼女は自分が誰でもないことをしつてしまつた。彼女の涙は自らの心に影を作る。彼女にとつての光を覆い隠すように。

『どうして、あなたが泣くの……？　あなたはあなた、押し付けたのは私だよ……？　あなたが苦しむ必要なんてないはずでしょう？　あなたは私じゃない、あなたのだから』

最上心は詩歌の中で静かに咳く。その言葉が詩歌の耳に届かないことは知っていたけれど、彼女にできたのは咳くことだけだった。

『悪いのは私なんだよ……？』

『私がべつの世界で生きたいと望んでしまつたから、あなたは私の夢を叶えてくれただけ……。私の居場所はあなただよ……？　私の居場所を作れたあなたが自分の居場所を作れないわけがない……』

シーカは夢の中で咳いた。届かないかもしれない言葉を夢の中で

咳くことしかできなかつた。

『もう、誰かが傷つくのは嫌』

「ただいまあつと……」

大人の翔と長い黒髪を携えた女が対峙するなか、頭を搔きながら現れたのは男の臘だつた。

「あら？ 早かつたわねえ～」

耳に残る甘つたるい声が臘をイラつかせる。

「他の奴らに何をした？」

「ふふ、同じこと聞くのね。ちょっと心に触れて、私の創った偽者の世界に飛ばしただけ」

「こいつは何を面白がっているんだ。いや、面白がってなんかいな。笑っているのは口だけじゃないか。

「お前は何者だ？ なんで、そんなことができる？」

「私は神よ。最初の世界を創つた、ね？」

やつぱりだ。こいつは自分を偽つている。まるで

「名前は？ お前の名前」

「あら、そういえば初めて聞かれたわね。そうね……。私は、ルシファー。でも何で？」

ルシファー……魔界の王ルシファー、確かにもつと早くに聞いていれば、名の通りだと思つただろう。けど、こいつは……知り合いでにそつくりな表情をするから。だから、わかつてしまつたのだ。こいつは、彼女は悪いやつじゃない。

「あんた、不器用なだけなんだな」

そう言つて苦笑する彼に彼女は目を細めるだけだつた。それは彼女にとつての戸惑い、だつた。

臘は最強と呼ばれてもなお孤独に恐怖した。そんな彼だから、孤独に敏感だつたのかもしれない。

『孤独』

彼女の感情はそんな言葉で表現できるものではないこ

とが皇にもわかつていた。

この女は何を背負つているのだらう。なぜ、自分を偽つてまで敵であらうとするのだらう。

皇が気付いたのは奇跡だつた。彼女は創るのが上手だつたから。彼女の偽りを見抜ける者がいるはずがなかつた。

それでも、皇には気づくことができた。それは、彼女によつて創られた、“彼の恐怖の世界”に飛ばされたことが影響していたのだらう。

皇は恐怖から逃げ出した。逃げ切る力があつた。そして気が付かないうちにその恐怖は水月や翔の存在によつて、恐怖ではなくつていた。

けれど、皇は逃げ続けていたから、そんなことにも気付けなかつた。恐怖でないことに恐怖し続けていたのだ。

そんな彼を助けてくれたのは、この目の前にいる彼女なのかも知れないと。

「あなたは、何を背負つてゐる。何のために自分を創る？」

その言葉に彼女は大声をあげて笑い始めた。

しばらくの間、彼女の笑い声だけが響く、皇と彼女のやり取りに翔は意味がわからないといった様子でただ自分と心のことだけを考えようとしていた。

「ふふ、この世界の人には教える氣はなかつたんだけじねえ……」

細められた彼女の目に、どこか寂しげなものが移るのが、皇にはもちろん、翔にもわかつた。

「私は最初の世界を作つた。自分のためにね。そして、世界は分岐していった。始めのうちには、止めることもできたかも知れない。けれど、止めなかつた。だつて、面白かったんだもの。少しずつ違う世界。大きく違う世界。そのどれもが、私にもそんな可能性がある

んじやないかつて、分岐して行く世界が楽しかつたのよ」

早口に、まるで誰かに言い訳するようにそりそりと、彼女は更に

話し続ける。

「だけど、世界の分岐、それは私が与えた力じゃない。つまりね、分岐し続いている世界は自らの変化に耐えられなくなつてきている。このままじゃ、世界は壊れるかもしれない。それは私にもわからなすことだけれど、いつかは壊れてしまつと私は思う。私はそれを止めたいのよ。私が創つてしまつた世界だから。それが、私の義務だから」

皐にも翔にも、理解できる話ではなかつた。けれど、彼らには1つの疑問があつた。

「それと、あの子が、あのドールが何か関係があるのか？」

先に口を開いたのは皐だつた。それは翔にとつて驚きだつた。皐と彼女は何の接点もなかつたはずだから。それに皐の口調には、今にも叫び出しそうな棘のようなものが見え隠れしていた。彼はそんなに感情を表に出す人間じゃないはずだつたからだ。

「あるわよ」

その言葉は翔にとつて驚きと同時に聞きたくない言葉だつた。しかし、この感情が何なのか翔にはわからないでいた。

「弱つた世界は、同じ人間が少しずつ違つ世界を送るだけの世界になつていたの。大きく違う世界に分岐できたのは最初の頃だけ。今の世界に新しいモノを創る力なんてないはずだつた。それなのにね。彼女は生まれてしまつたの。この世界ともう一つ、あの子達の世界でね」

あの子達とは、この世界に現れた翔たちのことだろひ。

「それにね。キミにはもう言つたけど、月見里翔と最上心が出会つか出会わないかで、世界が変わる。それは、この広すぎる世界のかで小さなことだけれど。ありえないことなのよ。今の世界にとつて、それは大きすぎる変化なの。だから、キミたちには何かがある。世界を救えるかもしないのよ」

握った手の温かさが翔には何だか不思議な感じだった。確かに嬉しい。心といれること、好きでいていいんだとわかったこと。でも

「……どうしたの？」

考え込んでしまっていたのだろうか。心に引っ張られていたはずの翔は立ち止まり。顔の前には心の顔があつた。

「あ、いや、なんでもないよ」

「そつか……」

彼女の表情が少し曇つた気がした。それは見たことのない表情だった。

「あのせ、ホントに私でいいの？　だつてすぐに会えなくなるし。ホントはね、すつぐく悩んだんだよ。翔に気持ちを伝えてもいいのかつて。でも、伝えなかつたら絶対に後悔するつて。けどね、伝えても後悔してる自分がいるんだよ……」

翔がずっと悩んできたことと同じだ。心も同じことで悩んでいたんだと思うと自然と頬が緩んだ。けれど、今、翔が悩んでいることはもつと別のことだったのだが、この翔にはそれがわからない。

「それせ、オレもずっと思つてた。……何ていうか、その、オレもずっと……」

どうしてか続きの言葉が出てこない。好きだつて、たつたそれだけの言葉が出てこない。

恥ずかしいとか、そんな理由じやない。何でだか、その言葉を口にしてはいけないような。

「翔？　泣いてる……？」

頬を伝う熱い線を心が優しくなれる。なんなんだよ……。

「あそこ、座る……？」

優しく心が促してくれる。

小さな公園のベンチに2人で座ると、手を重ね。静かに気持ちを

吐き出す。それは意味不明なことを言つていただろう。心は静かに手を握つてくれた。

「オレ、言えないんだ。口に出しかゃいけない気がして。何て言つが、幸せが怖い？ 違う気がする。オレは言えなかつたから、だから……。あの時…… オレは」

オレは痛む頭を片手でおさえながら、心の手を握る手に力を込める。

「何か、少しだけわかる気がするよ。ん？ わかんないのかな……？ 私もさ、翔とこうして居られることが不思議なの。ホントは一緒に居られなかつたはずだから……？ 何言つてるんだろうね。自分でわからんないや」

そう言つて笑う彼女を翔は何を言うでもなく見つめていた。

「私ね、夢を見たの。翔とね、私以外の女の子が一緒にいる夢。その子と翔、同じ学校に通つててね。その子ね、私と似てるんだよ。それで、私も翔のそばに居たいって思つて、あの子だけずるいって。それでね、告白したんだ。……けどね、今わかつたんだよ。あの子、私じやないけど私なんだつて。私の夢を、私のわがままを、叶えてくれる子なんだつて。あの子はあの子、私は私、けど、あの子と私は一緒なの。何言つてるんだろうね。けど、それが事実みたいなんだよ、不思議なことに」

そう言つて立ち上がろうとする心の手を更に強く握つている自分がいた。どうしても離せなかつた。

強く痛みだす頭が、2人の女の子のことを思い出させる。

1人は、事故で走れなくなつた足を引きずつて謝りながら自らの命を絶つた女の子 最上心。

もう1人は、自分の世界を探したいと頭を抱えていた女の子

小鳥遊詩歌。

彼女たちはとてもよく似た顔をしていた。

「どうして……？」

今、来るはずだった光が来ない……。

それどころか、人の気配すらしない。皐は、文芸同好会の部室で膝を抱える少女へと視線を移す。

自分がこの教室に足を運んだ時、やっぱりあの光は月見だったのだと確信した。なのに……。

「ボクは、ボクは……」

「なんで、どうして……？」

誰も来ないわけがない……。だって、それだけが皐を認めてくれるものだつたはずだから。

誰も来ない……？

「ありえない。だつて、ボクの光は、あのがなかつたらボクは……」

呟いてみたところで誰も来る気配はなかつた。そんな、どうして。そんな感情が皐に押し寄せる。

けれど、皐のキレイな紅い瞳は再び濁ることはなかつた。

月見と小鳥、彼らに出来うつ」とで皐も成長していたらしかつた。

「月見は男には厳しい……か」

思わず苦笑してしまう。月見は男の姿の皐も、女だと接してくれていた。それに気付くのに時間はかかってしまったが。

「はあ……。自分の想い人が自分だとはね」

皐は、膝を抱える少女へと歩み始める。決意に満ちた紅い瞳はいつもより一段とキレイで、濁つた目には眩しいくらいの決意だったのかもしれない。

気が付くと、元居た場所　たくさんのドールたちが置かれたあの場所へと戻つていた。

どうやら皐も同時に戻つたらしい。互いに見つめ合ひと、何故か笑いが込み上げてきた。

皐は何か決意に満ちた紅い瞳の行き場をなくし、キヨロキヨロと間抜けな顔をしていた。

かく言うオレもひどい顔をしているのだろう。何が起きたかわからぬうえに、いろいろな記憶が頭の中を駆けずり回っていた。

なのに何故だろう。皐の顔を見たら安心できた。笑いが止まらない。そして2人で笑いあつた後、自分のことを神だと言う彼女に視線を移した。

「私どこのドールの能力は、心に触れることと、強制支配。それと私が元々もつてた創る力を応用して、あなた達の心から擬似世界を創つたのよ。」  
翔くんには希望を、皐くんには恐怖を、皐ちゃんには絶望を、キミには幸せを、ね」

翔と皐の視線を受けた彼女は肩を竦めてみせる。

「それってどういう……？」

あれ？ なんだか1人だけ取り残されている気がするのだが……。

「それぞれが一番染みる世界を創つて、あなた達を飛ばしたのよ。そうね。例えば、あなた、月見里翔は辛いことをあたえても屈しょうとしないじゃない？ けれど、幸せには弱いのよ」

えーと、うん……。今までの世界は精神攻撃とかそういう類のつてことらしい……。

「あの世界は事実なの？」

口に出したのは皐だった。口調からして、オレたちの世界の皐だらう。

「いいえ、と答えるのが適當のかしらね。あくまでも心から創りだした擬似世界。あなたにとつての絶望は、あの光がなかつたらといふ心の不安だったのね。安心して、あの光は事実だから」光……？ 何のことだろう？ 霊のほうを向くと顔を真つ赤にして、じちらをじちらうと……。

あえて口には出さないが、お前今は男の姿だからな……。  
「けど、おかしくないか？ あれがオレの心から創った世界で、今 の話からすると、心<sup>うら</sup>が事故らなかつたとこからが、オレの望んでた 幸せだろ？」

「え、ええ。それで合ってるわよ？ 心ちゃんが怪我しないで2人 で幸せになるのがあなたの望んでた幸せ。しかし、ホントにイレギ ュラーよね。あなたたち。こっちの翔くんは一瞬もそれを希望だと は思わなかつたし。翔くんは恐怖が恐怖ですらなかつたみたいだし。 霊ちゃんは絶望どころか、それを強さに変えてみせるし。キミは何 ？ キミが戻つて来れた理由だけはわかんないし。ホント嫌になる わ」

と彼女は地団駄をふむ。それを面白がるよつな目で見ているのは この世界の靈だ。

「だから、イレギュラーだから、オレたちに話す『気』になつたんだろ う？」

「そうね、さつき確かめたけど、この世界はもう未来をなくしたみ たいだし。あ、未来がないとか、終わるとかつて意味じゃないわよ ？ この世界に決められた行く先がなくなつただけ。だから頼るな ら未来へ分岐してない今しかないもの」

何の話をしているのかはわからない。ただ、彼女は『キミが戻つて 来れた理由だけはわかんない』と言つた。

他の3人とは違う。オレは幸せを受け入れようとしなかつた わけじやない。あの世界が本物だと信じようとしたじやないか。 「だつて、だつてオレは……あの手を離すことができなかつた。あ の最上心があいつじやないことがわかつても、離すことができなか

つたじやないか」

気が付くと自分の暖かくなつた掌を見つめていた。

「え？ ジャあ、何で……。キミは……？ キミがそれを幸せであつて欲しいと望む限り、あの世界はあなたの幸せだったはず。キミが過去を思い出したとしても、キミがその幸せをとつたのなら何で……？」

彼女にもわからないことがあるんだな。彼女の言ひ方からすると、その世界を 例えば、絶望の世界なら絶望を、絶望だと思わなければ、そこの世界から出られるとのことだろつか……。

だとしたら……オレは、なんで……？

「ルシファー、最上心のこと、こいつには……」

不意に声をだしたのはこの世界の翔だつた。

「へ？ ええ、わかってるわよ。今の状態が最善なら、不安要素は作りたくないもの」

最上心のこと……？ まだ、オレは知らないことが、思い出してないことがあるのか……？

「それと、えつと、別の世界のオレ？ お前、昔のこと思い出したんだよな？ もしかして、最上心は、その……自殺じゃないか？」

「そ、そうだけど……？」

「ルシファー、最上心は、その……自殺なのか？」

「え？ 死因……？ そんなの気にしたことなかつたけど、でも……。ちょっと待つて」

そう言い残すと彼女は視界から消えた。ルシファーって名前だつたのか。『ルシファー』 魔界の王、墮ちた天使、だつたか。世界を創つた彼女が魔王と呼ばれるなんてな。彼女は自分が魔王と呼ばれていることを知つていてるのだろうか。知つていて、世界を救おうとしているのだろうか。

「……月見」

何かを考え込んでいたのだろうか。振り向くと直ぐ近くに墨の顔があった。

「何を悩んでいるのか知らないけど。辛い」と思って出したなんでしょう？ だつたら泣けばいいんじゃないかな？ こつちに戻つてから、月見、泣いてるみたいなのに泣かないんだもん」

月見、泣いてるみたいなのに泣かないんだもん」

励ましてくれていいのだろうか。星の紅い瞳は、本気で心配してくれているのか少し潤んでいるようで、それにとてもキレイだった。

「……月見はボクの光だから。光が曇つてたんじゃ、また濁つてしまつから」

ぼそぼそと呟かれた皐の声は聞き取れなかつたけれど、皐の顔が更に近づいてきて、聞き返すことができなかつた。

えつと、これって……キス？ 赤くなつた顔に、同じ様に顔を赤くした皋の……その唇が近づいて

「ちよ、ちよっと待て、お前、今は男だからな……。」

離れていた舉の笑顔はとても可愛らしかった。  
もちろん、

男の♀の顔が、ではなく、本来の女の子の♀の顔を想像して、だ。

「うん、それじゃ、ルシファードが戻るまで、ボクたちの考えをまとめとこうよ」

皋は手を叩いてそう言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9533j/>

リアン 壊れた記憶と絆の世界

2010年10月8日13時56分発行